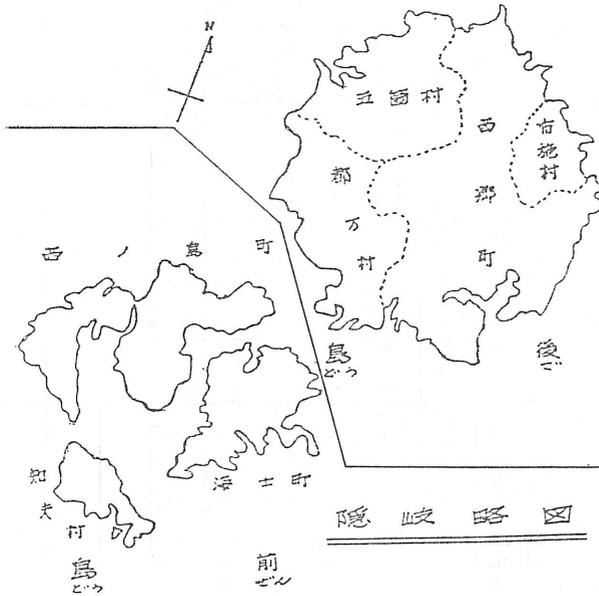


隠岐島の昔話



一 はじめに

流人の島として知られる隠岐島は、本土から北へ約六〇キロ離れた日本海中にあり、四つの主な島から成っている。このうち島後の島は人口が二万で最も大きい。そこから汽船で一時間あまりかかる島前には、三つの島が散在し、人口も西ノ島が五千、中ノ島が四千、知夫里島が千と、三島合わせても一万にしかならない。

ところで、筆者が隠岐島へ住むようになった昭和四八年までに採録されていた昔話は、先行文献を見ると島後で一六九話、島前ではわずか三三話にすぎず、地域的にも片寄ったものであった。⁽¹⁾

その後、島根大学昔話研究会(島前・島後調査)、民話と文学の会(島前)、島根県立隠岐島前高等学校郷土部(島前・島後)等によって発掘を進めた結果、島前三三七話、島後二三四話の資料となり、ようやく隠岐地方の昔話に関する概要がつかめるようになった。

二 語りについて

1 名称・語りの請求・相槌

昔話のことを当地では「とんと昔」、「とんとん昔」、あるいは単

【表1】昔話分布状況表(同一語彙の同じ語は、同じ字、別の日時を置いても1語と数え、重複を避けた) 語数()内は語数

語彙	島							島前計	島後計	島計	島前計	島後計	島計
	深土町	西ノ島町	田楽村	西條町	西ノ井	南港村	五箇村						
初物理	I 初物起源	9(7)	3(3)	1(1)	8(6)	1(1)	4(3)	—	13(10)	13(9)	26(19)	33(24)	59(43)
	II 初物香箱	13(7)	5(4)	7(7)	4(3)	5(5)	8(7)	—	25(23)	17(15)	42(38)	30(28)	72(66)
本	A 盗尻餅	3(2)	9(4)	4(4)	3(2)	6(3)	5(2)	4(4)	16(15)	18(14)	34(29)	—	—
	B 悪か初物	9(4)	—	5(3)	4(4)	9(3)	4(3)	—	23(19)	17(13)	40(32)	—	—
	C 初物銀紙	1(1)	—	1(1)	3(3)	—	—	—	2(2)	3(3)	5(5)	—	—
話	A 異類変	4(1)	2(2)	8(4)	4(3)	3(1)	2(1)	—	14(12)	9(5)	23(17)	—	—
	B 異類七筋	2(2)	1(1)	—	—	—	2(1)	—	3(3)	2(1)	5(4)	—	—
	C 異類龍生	9(2)	6(2)	3(2)	4(1)	4(2)	6(2)	1(1)	18(12)	15(12)	33(24)	—	—
昔	A 天と水神	—	—	—	3(2)	—	—	—	—	—	3(2)	—	—
	7 呪	—	1(1)	1(1)	1(1)	—	—	—	2(2)	1(1)	3(3)	—	—
	8 運命の箱梯	3(3)	1(1)	2(1)	2(1)	—	—	—	6(5)	2(1)	8(6)	—	—
	9 信	2(2)	2(1)	2(2)	—	—	—	—	6(5)	—	6(5)	—	—
	10 致	—	—	—	3(2)	—	—	—	—	3(2)	3(2)	—	—
話	A 親と子	5(2)	1(1)	3(3)	9(3)	2(1)	6(5)	—	14(9)	17(9)	31(18)	—	—
	B 兄弟相状	—	—	1(1)	—	—	—	—	—	—	1(1)	—	—
	C 賊人	16(6)	22(6)	11(5)	7(5)	23(6)	13(7)	1(1)	49(17)	44(12)	93(29)	—	—
笑	12 飲酒番	1(1)	1(1)	2(2)	—	—	—	—	4(4)	—	4(4)	—	—
	13 おどけ番	2(2)	3(6)	2(2)	2(2)	1(1)	1(1)	—	12(10)	4(4)	16(14)	—	—
	14 雀籠	10(10)	10(9)	6(6)	3(3)	4(4)	4(4)	—	26(23)	11(10)	37(33)	—	—
	15 前掛と小僧	17(6)	7(7)	3(6)	7(6)	10(6)	7(5)	—	32(11)	24(11)	56(22)	—	—
	16 偶然の幸福	—	1(1)	1(1)	4(2)	—	—	—	2(1)	4(2)	6(2)	—	—
話	A 悪か番	6(6)	1(1)	2(2)	—	4(4)	1(1)	—	9(7)	5(5)	14(10)	12(12)	26(26)
	B おわて番	9(9)	4(4)	2(1)	1(1)	1(1)	3(3)	—	15(12)	5(4)	20(16)	6(6)	26(26)
	C 悪か町	1(1)	—	—	2(2)	1(1)	—	—	3(1)	3(2)	6(3)	—	—
	D 悪か賢	3(6)	6(6)	1(1)	1(1)	2(2)	2(1)	1(1)	15(9)	6(6)	21(9)	—	—
	E 悪か探	4(3)	1(1)	—	2(2)	—	—	—	5(3)	2(2)	7(5)	—	—
	17 形式番	6(6)	5(6)	7(5)	—	2(2)	2(2)	—	18(19)	4(4)	22(23)	33(37)	55(50)
合題不能		1(1)	—	4(3)	—	1(1)	—	—	5(4)	1(1)	6(5)	6(4)	12(13)
計		141(87)	108(79)	33(28)	77(61)	77(62)	70(62)	7(7)	337(170)	234(122)	571(292)	337(170)	908(462)

<出典資料>

- (1) 横地満治・浅田芳朗『隠岐島の昔話と方言』(昭11・郷土文化社)
- (2) 広戸淳『隠岐の昔話』(昭32?・島根大広戸研究室)
- (3) 白田甚五郎「隠岐の口承文芸の宗教的社会的位層に関する調査の一節」(『国学院雑誌』第61巻第2・3号 昭35・国学院大)
- (4) 大森郁之助「隠岐島島後南部の昔話」(昭35『国学院高校紀要』第2集)
- (5) 横山弥四郎「知夫郡昔話」(昭10・『昔話研究』1の8・三元社)
- (6) 岩倉市郎「隠岐の島昔話」(昭11・『昔話研究』1の9・三元社)
- (7) 民話と文学の会『島前の民話』(昭51)
- (8) 島根大昔話研究会『隠岐・島前民話集』(昭52)
- (9) 斎二三子「隠岐の昔話」(昭50・昔話研究懇談会『昔話一研究と資料年報4号』三弥井書店)
- (10) わたなべたつお「知夫のむかし昔」(昭46~49・隠岐島前教育委員会『島前の文化財』第1号~第4号)
- (11) まつうらやすまる「西ノ島の昔話」(昭50・51 隠岐島前教育委員会『島前の文化財』第5号・第6号)
- (12) 島根県立隠岐島前高校郷土部『島前の伝承』(昭50~53・第1号~第8号) *なお、第7号からは『隠岐島の伝承』と改称
- (13) 島根民話研究会『隠岐島布施村の民話と民謡』(昭53)

〔表2〕 昔話収録割合

() の数字は収録数

分 数	地 区			
	島 前	島 後	隠岐合計	全 国
動 物 譚	11% (38)	13% (30)	12% (68)	13% (1,413)
本 格 昔 話	46% (153)	58% (135)	50% (288)	50% (5,282)
笑 話	42% (141)	29% (68)	37% (209)	37% (3,958)
分 類 不 能	2% (5)	0% (1)	1% (6)	0% (0)
合 計	100% (337)	100% (234)	100% (571)	100% (10,674)

注 全国の数字は、関敬吾「民話」——『日本民俗学大系・10』——(昭32 平凡社刊)による。

〔表3〕 昔話のスタイル (話頭句・結句がどれだけ整っているか)

数字は% () 内は実数

地 区	島 前				島 後				総 計	
	海士町	西ノ島	ノ町	知夫村	合計	西郷町	都万町	布施町		五箇村
結句・話頭句あり	15 (20)	9 (8)	78 (59)	29 (87)	14 (9)	53 (41)	20 (13)	29 (2)	30 (65)	30 (152)
結句のみなし	43 (58)	22 (19)	14 (11)	29 (87)	36 (24)	14 (11)	17 (11)	14 (1)	22 (47)	26 (134)
話頭句のみなし	3 (4)	2 (2)	5 (4)	3 (10)	6 (4)	17 (13)	2 (1)	0	8 (18)	5 (28)
結句・話頭句ともなし	40 (54)	67 (59)	3 (2)	38 (115)	44 (29)	17 (13)	61 (39)	57 (4)	40 (85)	39 (200)

注 出典資料のうち、(1)・(5)・(6)・(10)・(11)を除いて作成した。また、〔表1〕と同様に同一話者の同じ話は、聞き手、訪問日時が違っても、初回採訪時のものだけを採用し、重複は避けた。また、話が中断のまま終わっているものや、テープ処理の不手際等で話頭句不明のものや若干は、この数字には含めなかった。さらに形式譚についても、除外している。

【表4】 話頭句分布 数字は%、() は実数

話頭句	島 前				島 後					総 計
	湊土町	西ノ島町	知夫村	合 計	西郷町	都万村	布施村	五箇村	合 計	
とんと音	2(3)	7(6)	7(54)	21(63)	11(7)	34(27)	3(2)	29(2)	18(39)	20(101)
とんとん音	22(30)	10(9)	7(5)	15(44)	0	21(16)	22(14)	0	14(30)	15(77)
音 (音)	32(43)	11(10)	14(11)	21(64)	39(26)	10(8)	13(8)	14(1)	20(43)	21(107)
(その他)	1(2)	0	0	1(2)	0	1(1)	0	0	-(1)	1(3)
(話頭句なし)	43(58)	71(62)	8(6)	42(126)	50(33)	33(26)	63(40)	57(4)	50(103)	25(227)
合 計	100(136)	100(87)	100(76)	100(297)	100(66)	100(78)	100(64)	100(7)	100(215)	100(514)

注【表3】の注に同じ

【表5】 結句分布 数字は%、() は実数

結句	島 前				島 後					総 計
	湊土町	西ノ島町	知夫村	合 計	西郷町	都万村	布施村	五箇村	合 計	
その音	9(12)	2(2)	3(2)	5(16)	2(1)				-(1)	3(17)
その音のよう			3(2)	1(2)						-(2)
そっぱかしの音	4(6)			2(6)						1(6)
その音こっほり		2(2)	8(6)	3(8)						2(8)
その結こっほり		2(2)	1(1)	1(3)						1(3)
その音のぐんべのは			45(34)	11(34)						7(34)
そのぐんべのは			16(12)	4(12)						2(12)
その音のぐんべ			1(1)	-(1)						-(1)
とんとのぐんべのは			1(1)	-(1)						-(1)
その音のとん							2(1)		-(1)	-(1)
とん(5)					12(8)	13(10)	16(10)		13(28)	5(28)
すっどんからり(6)					2(1)	3(2)			1(3)	1(3)
すっどんからん						22(17)	3(2)	28(2)	10(21)	4(21)
すっへらほん					3(2)				1(2)	-(2)
すっどんからり(結)ん(…)						27(21)			10(21)	4(21)
す とん					2(1)				-(1)	-(1)
(その他)	4(5)	3(3)	5(4)	4(12)		5(4)	2(1)		2(5)	3(17)
(結句なし)	83(113)	90(78)	17(13)	68(204)	80(53)	31(24)	78(50)	71(5)	61(132)	25(336)
合 計	100(136)	100(87)	100(76)	100(297)	100(66)	100(78)	100(64)	100(7)	100(215)	100(514)

注【表3】の注に同じ

に「昔」などと呼んでおり、決して「昔話」とは表現していない。もしも昔話を聞かせてくれるよう頼んだとすれば、「明治〇〇年ごろ、初めて電話がついて……」というような過去の出来事が話し出されてしまうこととなる。

したがって、昔話を請求する際は「爺さんよ、とんとん昔語って聞かせな」、「昔語って聞かせ」などと、「昔を語る」というふう
に言っており、話すのではなく語るのだという意識の名残りを強く認めることができる。

相槌は「ふんふん」「ふうん」「うんうん」など平凡であるが、西ノ島町浦郷地区では「フーン」と語尾を少しあげて打つのがきまりであったと言われている。

2 形式句（話頭句・結句）

表4・表5参照

3 昔話に関する言い伝え

昔話は冬の夜、炬燵や囲炉裏で語られることが多かった。語る時期などを示す言い伝えの主なものをおおげに挙げておく。

正月ならとんと昔（都万村歌木）⁽²⁾

話は節分の晩（西郷町有木）⁽³⁾

昔は二十三日の晩に語れ（島前一带）

昔は庚申さんの晩（同右）

昼昔を語る馬鹿はなし（知夫村多沢）⁽⁴⁾

マンペーの昼昔（都万村中里）⁽⁵⁾——マンペーとは、昼間に仕事も

せず、ぶらついている怠け者をさすことばである。
昼昔話をする者はトージンだ（西郷町加茂）⁽⁶⁾——トージン（唐人）とは変わり者のことをいう。

3 語り手指名

知夫村仁夫出身の松谷ハナ氏（明治34年生・西ノ島町珍崎在住）の話によると、囲炉裏とか炬燵の周りに子供たちが寄って昔話は語りあつたが、その順を決めるのに次のようにしていたという。

一人が目隠しをし、「ゴロ、ゴロ、ゴロ、ゴロ……」と唱えながら、手元にある手まりとか湯のみなどの任意のものを隣に渡して行き、目隠しした子が適当に「ストン」と言った時、手まりなどを手にしていた子が昔話を語らねばならなかったという。そして、このことを「回り昔」と呼んでいたそうである。また、この方法は「回り歌」といって、歌を歌う順序を決める際にも用いたという。同様のことは海士町福井の花岡ツギ氏（明治23年生）からもうかがった。さらに昭和五一年夏の民話と文学の会による島前民話調査のおり、常光徹氏によつて西ノ島町小向で、松葉に囲炉裏の火などをつけて回し、火の消えた松葉を握った子供が昔話を語らねばならぬとする、いわゆる「火回し」のふうのあったことが確認されている。

これらの作法は、形の崩れは見られるものの、昔話の語りは本来、神の意志になつた者が行うものとする、神の意志定めの儀式の根拠を示すものかも知れない。

三 考察（隠岐の昔話の特色）

1 分類割合は全国平均と同じ

わたしたちの収録を含めて、これまで当地で集められた昔話資料は、表1で見られるように島前・島後を合わせて延べ二四四話型、五七一話数になる。この表は関敬吾氏が『日本昔話集成』で示された分類に従っているのであるが、隠岐島の伝承傾向は、全国のそのミニ版とでもいうべき姿をしているのに驚かされる。

というのも、関氏が昭和三二年『日本民俗学大系』第一〇巻（平凡社）に発表された「種類別・地方別昔話分布表」の全国集計に見られる動物譚・本格昔話・笑話の割合と、隠岐全体のそれとが、みに一致しているのである。

これを細かく眺めると、島前、島後の伝承割合に違いが見られるものの、トータルでは全国集計の割合に等しいのである。この結果は、偶然などという表現で片づけられない何か隠れた意味を感じさせる。離島、隠岐もやはり日本文化圏に含まれていることを、これは示しているものと考えてよいのではあるまいか。

2 あまり良くない伝承状態

一口に言って隠岐島での昔話の伝承状況は必ずしも良好なものではない。それは次のような点からうかがわれる。

- (1) 相対的に語り手が少ないこと
 - (2) 語り手の昔話管理数の少ないこと
 - (3) 型の崩れた語りの多いこと
- (1)から説明すると語り手の延べ数は、島前七七名、島後七〇名、

計一四七名になるが、これは(2)の昔話管理数と合わせて眺めると、一人平均三・九話となる。最高は西郷町の野津ヨネ氏の二一話で、二位も同町の森乙美氏の一九話、以下、知夫村の中本マキ氏が一八話、海士町の川西茂彦氏の一五話と続くのであるけれど、他地区のように一〇話以上管理している人たちは見られない。言いかえれば、質の高く、多くの昔話を知っている古老が、もはや存在しにくい環境にあることを示すものであろう。

(3)について見ると、本来、昔話に備わっている二大形式句である話頭句と結句が、現実の語りの場で既に忘れ去られ、一方、あるいは双方とも欠落しているものが非常に多く（表3参照）、隠岐全体で両者とも揃って語られた話は三〇%にすぎないのである。ただ、このことも地域によって極端な違いを見せている点には注意を払っておきたい。例えば、両者とも揃っている語りの割合を町村別で見るとなれば、小さいところで島前では西ノ島町の九%、海士町の一五%となっており、島後でも西郷町の一四%、布施村の二〇%がある一方、大きいところでは、島前、知夫村の七八%、島後、都万村の五三%が認められる。そして、後者の知夫・都万両村では、語りそのものも他町村に比べて味わいの優れたものが多く、話の種類も豊富だったところから、二大形式句の完備と語りの状態の良さは、重要な関連を持つものであることが推察される。しかしながら、隠岐全体を眺めた場合、昔話を知らぬ古老も多く、仮に話を聞くことにはできて二大形式句の欠落がひどかったり、モチーフが脱落していたり、さらにぎめの細かな味わいのある語りの少なさを痛感する。このことは筆者が昭和四八年一月、海士町立海士中学校の生徒一五五名を対象に行ったアンケートの結果からも実証される。すなわち、家庭内で昔話を聞いた経験者が一九%（二九名）にすぎず、

一方、本土の奥出雲地方、仁多郡横田町立横田中学校島上校舎の生徒八一名に前年（昭和四七年一〇月）行った調査の同項目の結果は、五八%（四九名）であり、大きな開きを見ている。ちなみに家庭外で昔話を聞いた経験についても同じ傾向で、海士中一四%（二一名）、横田中二九%（二五名）であった。言いかえれば、半農半漁の離島である隠岐地方は、農業主体の出雲地方の山村に比べて昔話の伝承が、かなり薄れていることをこれは意味しているといえるのではあるまいか。

3 話頭句を考える

昔話の二大形式句である話頭句と結句については、かなり欠落の傾向にあることを前述しておいたが、それでは用いられている場合はどのような状態にあるかを眺めておきたい。

まず話頭句について見ると、表4から分かるように「昔」、あるいは「昔々」が一番多い。しかしながらこの語は「とんと昔」「とんとん昔」の「とんと」「とんとん」の脱落したものと考えられる。比較的優れた語りの多い知夫村や都万村では、この「昔（昔々）」よりも「とんと昔」が最も多く、特に知夫村においては昔話の七一%がそれである。続いて「とんとん昔」となる。

また、昔話が本来、作物の稔り豊かならんことを祈り、神に拝けるべき機能を持っていたとする仮定に立って考えれば、「とんと昔」の「とんと」は「尊」から転じたとも見られるわけで、それを傍証すべき事実が昭和三五年、臼田甚五郎氏によって確認されている。⁽⁸⁾

氏は都万村の乃木あさ氏（明治17年生）から、五歳上で昔話の好きな田中ソージ氏が、語りはじめに「とんと昔がありました」と言いながら拍手を拍っていたと実演され、まさに「とんと昔」の「とん

と」が「尊」であることを思い知らされた」と述べておられる。これについては筆者も先年、海士町の浜谷包房氏（昭和3年生）から、同町御波地区で昭和一七年に五五歳ぐらいで亡くなった永原安貞氏が、同様の所作の後に昔話を語られたとうかがっている。

このように見てくると、「昔（昔々）」が「とんと昔」から「とんと」の脱落したものであり、「とんとん」も「尊」の意味を持つ「とんと」からの変化であることがうなずけるであろう。つまり、時間の推移に従って「とんと昔」→「とんとん昔」→「昔（昔々）」→（話頭句脱落）、と変化の道筋が認められるのではなからうか。

ところで、これらの話頭句の形は、町村によってその比重が異なるけれど、島前・島後の各合計では、さほどの違いはみられない。

4 地域によつて違う結句

一方、結句については表5で分かるように歴然として地域差が出る。それは島根県の本土部における変化以上に多彩な表現の違いを見せているようである。次に代表的なものをあげておく。

海士町—その昔・そっばっかしの昔
島前—西ノ島町—その昔・その昔こっぼし

知夫村—その昔のこんべのは
西郷町—とん・すつべらぼん

都万村—すつとんからん・すつとんかつとん・とんよ
島後—布施村—とん・すつとんからん

五箇村—すつとんからん

はじめに述べておいたが、島前は三つの島に人が住み、それぞれが独立した地方自治体となっている。海士町と西ノ島町の語りには

結句のつかないものが圧倒的だが、少いながら結句のある話を眺めると、両町に共通したものとして「その昔」が見られる程度である。知夫村はこの二町の影響は全くなく、「その昔のこんべのは」と独立している。なお、西ノ島に四例ほど見られる「……こっぼし」は、中国地方一帯に広がっている結句でもある。

島後の場合も、一つの島でありながら結句の変化は多彩である。西郷町の東南部には、西郷港を中心に「すっべらぼん」地帯があり、その周辺部に「その昔」地帯がある。同じ西郷町でも北部の中村地区は「とん」であり、これは布施村に続く。この形は南西部の都万村蛸木、および同村津戸地区に飛び火したような形で存在している。島の中央部の五箇村から都万村の大部分は「すっとんからん」、都万村の那久地区は「すっとんかつとん」等となっているのである。このような違いを生じた原因はどこにあるのだろうか。それは陸上交通の近年まで未発達であった特殊事情が、かなり影響を与えて来たのではなからうか。たとえば島後最大の幹線である北方道が、西郷港から五箇村の北方まで拡幅されたのは明治二八年であり、その幅は約四メートルであった。しかし、幹線から一步入ったところでは、道路といっても車両なども通らず、歩くにしてもかなり難儀なものであった。大正初年ごろまでは村の幹線道路といっても、約一メートルそこそこの山道であったのである。

したがって、島内各地区間の文化交流も海上交通によった場合が多く、とかく各地区で独立の気風が後年まで残されていたようであり、それが結句の地区ごとに異なる表現を育てあげたのではなからうか。

四 終わりに代えて

——主な話型「ネズミ浄土」を中心に——

昔話の中で多く聞かれた話型をみると、島前・島後ともトップが「ネズミ浄土」で、次いで「竹伐爺」が来る。三位以下を島前・島後総合で見ると、三位「桃太郎」、四・五位「食わず女房」・「瓜子織姫」、六位「蛇智入」(芋環型)、七位「餅は金仏様」、八位「親象山」・「馬の落物」、一〇位「古屋の漏」・「舌切雀」と続くが、ここでは一番多く聞かれた「ネズミ浄土」について、少し詳しく眺めておきたい。

断片も含めてこの話は島前で二二話、島後で一六話、合わせて三八話確認されている。

ところが、話そのものを細かく見ると、島前の語りは知夫村の例を除いてモチーフの脱落が多く、これに対して島後のものは概してキメが細かい。つまり、語りの質は島後の方が平均して上である。そして、話の型の点で両者ははっきりと違っている。それを明らかにするためには島前型のモチーフを中心しつつ、島後型を「」にして述べておく。

- 1 爺婆が山(または海)へ行く。「爺婆が家で焼飯を作る。」
- 2 昼食ににぎり飯を食べると一つ余る。「爺婆がそのまま家で焼飯を食べると一つ余る。」
- 3 爺婆が余ったにぎり飯を譲り合うと穴へ落ちるので爺が追いかける。「爺婆が余った焼飯を譲り合うと囲炉裏の隅の穴へ落ちるので、爺が追いかける。」

- 4 爺が行くと地蔵が三体立っているのを道を尋ねてネズミの国へ出る。〔同上〕
- 5 ネズミが歌を歌いながら唐臼を搗いているので、爺がネコの鳴きまねをするとネズミが米を放置して逃げる。〔同上〕
- 6 爺はその米を家へ持ち帰る。〔同上〕
- 7 隣の爺が聞いてまねるが失敗する。〔同上〕
- 8 だから人まねをするものではない。〔同上〕

この中で3の部分の爺と婆が「爺食え」「婆食え」……と何度も譲り合う部分が、島前・島後両方の話に共通して出てくる。これは全国の同類には見られないモチーフであるので、隠岐型の特色といえそうである。また、島前の方は爺婆が山、あるいは海へ出かけて昼食を摂るのであるけれど、島後の方は、わが家で焼飯を作り、それが囲炉裏の隅の穴に落ちるといふモチーフになっており、はっきり島前型と島後型に分かれる点に注意したい。このことは結句が地区によって多彩に変化していることとどう関連づけて考えるべきかとまどいを覚えるのである。

なお、「焼飯」というのは、にぎり飯の周囲に隠岐独得の味噌でまぶしたものを焼いて作った食物であり、他地方で呼んでいるところの「焼飯」とは全く違うものであることを付言しておく。

- (1) 表1の「出典資料」中(1)(2)(3)(4)(5)(6)(10)の昭和48年分まで
- (2) 酒井董美「都方村の昔話概観」——『都方村の民話』(昭53・島根県立隠岐島前高校郷土部)
- (3) 田中瑩一・酒井董美「隠岐・島後の昔話」——『山陰文化研究 紀要・第一八号』(昭53・島根大学)

- (4) 酒井董美「知夫村の昔話概観」——『隠岐知夫里島の民話』(昭51・島根県立隠岐島前高校郷土部)
- (5) 臼田甚五郎「隠岐の口承文芸の宗教的社会的位層に関する調査の一節」——『国学院雑誌』第61巻・第2・3号(昭35・国学院大)
- (6) (注3に同じ)
- (7) 酒井董美「島前地方と昔話」——『民話と文学』創刊号(昭52・民話と文学の会)
- (8) (注5に同じ)
- (9) 島根県教育委員会編『隠岐島の民俗』(昭48・島根県教育委員会)

(さかい ただよし・松江市立女子高校)